

ハムレット

日下部正哉

序

一幕一場の冒頭から妖気が立ち籠めている。デンマークには毒気が立ち昇っているのである。これが全体の雰囲気である。この妖気を鎮め毒気を払う力を備えていると思われる人はホレイシヨールとハムレットである。しかしホレイシヨールは如何にも誠実冷静な人柄であり、明らかな理性、明晰的確な判断力、何ごととも見のがさぬ注意力を持っているのであるが、同時に又如何なる運命もこれを静かに受け容れる人である。彼は、自己の運命に苦しみ悩むハムレットの心の寄りどころになる（恐らく彼はハムレットの苦しみと激情を、対比的に一層目立たせる効果を持つであろう）人柄ではあるが、自分から進んで毒気を払う仕事に当る人ではない。ハムレットは初めからこの毒気を彼の宿命として担っており、そおいう人として登場する。まもなく父の亡霊に会うことによって毒気が立ち昇るその根源を知ると共に、それを吹き払うことを自分の責任とする。彼が考える高貴な美しい人間の社会と彼の現実、即ちこの毒気、とはまさに正反対のものである。そして此の矛盾は誰れもが、何かの形で、一度は経験するものであり、ハムレットに於ては彼の生涯を賭けて闘う宿命となるのである。

劇は王ハムレットとノールウェイ王とのいきさつも、先王暗殺の経緯も、現王クロディアス即位の次第も科白のなかでの暗示にとどめてみな省き、聴衆の注意が専ら王子ハムレットとクロディアスとの対立関係、特に初めからハムレットに向う様に仕組んである。その上ハムレットに度々独白をさせている

が、それは背景や道具立ての無い舞台だけに一層聴衆の注意をそこに釘付けにしてハムレットを際立たせると共に、同時にそれが劇の進行に特別の効果を持つ様になっている。これは、ハムレットを見せる芝居である。

独白は抒情詩であるから、その人柄も又その時々の場合に応ずる心の働きの情態も偽りなく出ている筈である。ハムレットのソリロキーズには彼の行為を裏付ける一貫した彼の人柄、性格が表れている筈である。

処が従来ハムレットに二つの演出の仕方があって、一つは初演当初からのものと言われるアスレチック・ハムレット。パービチが当初どの様にハムレットを演じたかは恐らく判らないことだろうと思うが、武装した武士達の登場で始まって武装した武士達の登場で終り、開戦前夜の物々しい切迫した空気からハムレットの軍葬で終るまで、そのあいだ此の劇には武装した先王の亡霊、亡霊に敢然と立ち向い、又ポローニアスを刺し殺すハムレット、フォーチンブラス軍の通過、海賊船の話、『われこそは、デンマーク王家のハムレット』という墓場での名乗り、レアチーズとの組み打ち、最終の場でのハムレットの働きの、また独白では武器を手に荒れ騒ぐ海上に馬を進めて、とか今よりのちは残忍であれ等々があって、これらから見ればこれも成程と肯ずける解釈である。も一つはウェルテルに転生する内省型、狐疑逡巡型のメランコリ・ハムレットである。このハムレットは毒気に当てられ放して精神が分裂し、盛んに理性を掲げるが実行力はなく、仇討は延び延びになり、憂鬱と自責に明け暮れる臆病者、偶然の形で思わず仇討を遂げた時は自分も死なねばならず仇討の効果ゼロといった次第、結局毒気に負けて憂鬱に陥ち、ぐずぐずし、やがて人生を嫌悪し、終に人生をなげ出してしまい、人生に無関心になる卑怯者ハムレットである。或は、精々のところ、心弱くもなく実行力に欠けてもいないが、賢過ぎたので取るべき賢明な道を決めかね、ついに挫折した人というのである。

劇の効果はそれが与える印象の深さと強さにあるであろう。併し又その効果は、途中どれほど分裂や対立があっても、終局に於て統一された印象の深さと強さでなければならぬであろう。だとするとハムレットは、相反する解釈をとり得る分裂した印象をあとに残すという重大な欠陥をその内に含む失敗作で

あるということになる。沙翁はこの作で、作品の効果を犠牲にしても、何か新しい種類の劇を試みてみようとしたのかも知れない。しかし、この想像を許す根拠となる作があとに無いようだから、この様な沙翁の意図の寸度は徒らな空想に終る。精神分裂の人間を描こうとしたとも、又矛盾を含んだ劇をそのまま上演するほど無頓着であったとも、空想は我儘で切りがない。

此の劇は、罪の母と復讐という二つのモチーフを持っている。劇の相反する印象は、根元的にはこの二つのモチーフが劇の中で融け合わず、木に竹を接いだ筋立てで組み合わせられている、という違和感が最後まで残るところに由来するのもかも知れない。併しここで最も重要なことは、この様な違和感もまた相反する印象も復讐の実行に視点を置き、それを中心にして作品を理解しようとするところから生じているということである。仇討の実行に視点を置くことは罪の母のモチーフがモチーフとしてハムレットの苦しみに対応するだけの重さ、強さを持って働いていないから当りまえのこととも言えよう。そして此の見方に立てば、ハムレットの独白は感受性の強い若者の抑圧された懊悩と自責が発する激情的な言葉のつながりになり、人生問題にまで拡がる言葉や皮肉や語呂合せなどは何一つ実行出来ない男が抑圧され鬱積した自分の情緒を弄んで僅かに自分を慰めているに過ぎないことになって、そこに彼の成長は認めることが出来ないことになるのも亦当り前のこととも言えよう。併し、沙翁は従来の仇討のモチーフの他に非常に新しい要素を加えたのである。主役ハムレットの人柄である。沙翁は仇討もののあらましの筋立てを借り、大小色々の性格の対比と大小様々の場景の間の対比を用いて構成した、興味深い緊密な美しい構造の枠の中で、強力な原始的慾望と闘うルネサンス精神の展開と成長をこの劇で見せているのであって、彼は仇討を扱っているのではない。彼はハムレットという新しい意味を持った人間を描いているのである。ハムレットの独白が多いのもハムレットとクローディアスとの人柄の対照が非常に際立っているのもこのためである。そのどちらの人柄が立派であるか、そしてその立派な人柄の印象がどれ程深く強いものであるかが問題であって、二つのモチーフはこのために援用されているのにすぎない。この劇はモチーフに拘わらないで徹頭徹尾視点をハ

ムレットに置いて理解されなければならない。視点をここに置き換えれば、劇は統一した強い深い印象を与え、最早二つの相反する解釈は入る余地がなくなるであろうと思う。

ハムレットの宿命

王子ハムレットの宿命は先王ハムレットの弟で現在王位にあるクローディアスが作ったものである。彼は兄の妃を今自分の妃にして、王子ハムレットの母を近親相姦の罪に陥している。父母を敬愛している王子ハムレットの悩みがここから始まる。即ち、ハムレットの心の中には

1. 父は立派な武人で、高潔な気高い人であった。亡き父がなつかしまれてならない。突然の逝去には何か納得のゆかぬものがある。

2. 伯父クローディアスはもともと下品な感じの男だ。母を邪淫の罪に陥した憎い奴。それも父の死後ふた月と経つか経たぬうちに。これと父の急死とは、別に確かな証拠はないが、何か訳がありそうな気がする。それに横あいから出て来て王位をうまくぬすみとった奴だ。

3. あんなに父と仲がよく、荒い風にも当てず (I.2.141,2) 大切にされていたのに、父が死ぬとすぐ邪淫の床に誘われた浅墓な母。それに自分の身体にはこの母の血が流れているのだ。

この父、伯父、母を三つの頂点とする運命の三角形があって、その各頂点が影響し合ってハムレットの苦悩を甚だしく強くする働らきをしている。即ち、

1. 父を慕えば、母の所行が歎かれ、母の所行を歎けば伯父が憎くてたまらない。

2. 伯父を憎めば、父が増々慕われ、父を慕えば母の所行が増々情けない。

3. 母の所行を歎けば、亡き父が気の毒でたまらず、益々伯父が憎くなる。

ハムレットが登場するとき既に黒い醜い運命が彼の心に深くその爪を立て、彼の身のまわりに鉄の環をめぐらしている。彼にこれを突破する途はない。クローディアスは何となく怪しい、しかし確証はない。現在このクローディアス

と楽しそうに睦じく浮々としている母をただ言葉で諫めて改心させることが出来るであろうか、これも疑がわしい。それに、同じ汚れた血を身体に持つ自分に母の改心を迫る値打ちがあるか。結局運命から脱する途は自殺以外にない。併し、自殺を罪とするキリスト教精神は自殺を彼に認めない。これらが登場した時のハムレットの懊悩であり、彼の皮肉を含んだ第一声や第一独白の内容である。彼が登場して間もなく彼は伯父が父を暗殺した顛末を亡霊からきき、これで彼に運命の突破口が見付かる。同時に伯父に対する憎しきは、母の上に父のも加わつて二重になる。彼はここから、彼に苛酷な運命を作った男クロードディアスに対しての闘いに入る。

クロードディアスは権力慾、色慾といった、所謂醜惡な、原始的本能の慾望、ルネサンス精神とは正反対のものを表わす。或は爛熟退廃期のルネサンスの腐敗を表わしているのかも知れない。『イタリアかぶれのイギリス人は悪魔の化身』で、エリザ朝のイギリスの一般社会に入って来たルネサンスは既にこうした墮落を特徴として持つ爛熟期の大陸ルネサンスであったから。兎も角、クロードディアスは墮落した本能的慾望の化身である。醜惡な本能が持つ凶太さ、ねばり、要領のよさ、臆病、ずるさ、人情に感じない冷酷が彼の本性である。

彼に向つて闘うハムレットは、人間自然の情味に厚い人で教養が高く、純真誠実であつて汚れを嫌い、品性優れ理性明らかに、思考感情共に広く働らく人である。一つのことに捉らえられると、他のことも周囲も手段の良否も判らなくなる偏狹性センチメンタリズムは彼に見られない。しかも、相手と目的によっては残酷にも厳しくもなれる、しかも少しの無理もなくなることの出来る、人である。オフィーリアが「宮廷人の鏡、武人の誇り、学者の模範」(Ⅲ.1.159)とよぶ人であり、エリザ朝ルネサンスの理想的人間像である。ルネサンス精神は人生を肯定し人間に無限の可能性を信んずる精神、人生が含む未知なるものへの逞しい探究と冒険の精神、合理精神、新教的精神とギリシヤの肉体との融合を強く願う精神と言つて誤りではないであろう。之等に就ては「ハムレットの成長」の項で触れてゆく予定である。

劇ハムレットは、このエリザ朝ルネサンスの典型的精神が本能的惡の慾望と

闘う姿を、その悪の慾望が作り出した彼の運命に生涯を賭けてどの様に対処し打ち克ってゆくか、その間にその体験を通してどの様な自己成長を遂げてゆくかを生き生きと目の前に描いて見せる劇である。

ポローニアス、ガートルード、クローティアス

ポローニアス

ポローニアスは先王ハムレットの頃からの宮中顧問官である。当然「政策の筋道」に通じており、顧問官として才略、経験、手腕を積んでいる人である。彼はパリに弑つ息子のレアチーズに父親の教訓を垂れる。それは抜目のない自己中心の処世術であるが、そこには子を思ふ親心がよく出ている。その中で、『特にこの心懸けが大切ぢや。自分自身を誤間化さぬということぢや。そおすれば、夜が昼につづく様に自然お前は誰れにも誠をつくすようになる』(I.3.78-80)と言っている。ポローニアスは誠実ということを知らぬではない。別に野心がある訳でもなく、悪性でもなく、自分からハムレットの不為を計って動くのでもない。自分の娘に対する失恋から、てっ切り気がふれたものと思ひ込み、ハムレットを気違い扱いしてはいるが、臣下の分は心得て常に王子として接している。しかしハムレットは「ありふれた退屈な道化者」とか「下らぬおしゃべり屋」と言って彼を軽蔑し、又『ぢやあ人並に誠実な人間であつて欲しいね』(II.2.176)などと言っている。我々の目にもポローニアスはハムレットが言っている様な人として映る。この間のひらきは何処から来るのであろうか。多分、顧問官としてながい間大過なく、或は立派に、勤め上げて来たポローニアスが、年と共に「政策の筋道」ということにならずみ、それが彼の習性になり、世の中のこと一切これで間に合うと思ひ込む様になったことから起つたのではないであろうか。その彼の政策の筋道が現在どんなものであるかは彼が下僕のレナルドーに申し付ける指図(II.1.1-73)の中によく表われている。その筋道は要するに、廻り道の要領によって真相を掴むスパイ行為である。おまけにここで、おしゃべりの途中話の糸筋を見失い、もおろく振りを見事に発揮している。彼は王と妃の前で、『私は神様と陛下にこの魂を捧げ忠誠を捧げておる

もので御座います。その私が申しますので御座いますが、ハムレット様の物狂いの原因はちゃんと私には判っておるので御座います。万が一にも私が間違っ
てなぞおりましたら、私のこの頭はもう今迄通り寸分の狂いなく政策の筋道を
立てられなくなったということになる訳で御座います。』(II.2.44-9)『私が
確かに「斯うだ」と申しましてはずれたためしが今迄に御座いましたらお伺い
したいもので御座います』(II.2.153-5),『手がかりさえ御座いましたら、真
相の所在をつきとめて御覧に入れます、例え地球の中心にもぐり込んでおりま
しても、で御座います。』(II.2.157-9)と言って自慢し、自慢の「筋道」をひ
けらかすが、それが間違っているのだから誠に他愛ないことだが、此の筋道が
なが年のあいだに彼の習性となってくるにつれて彼の思考力は衰え、己惚れは
強くなり、今では誠実のかけらもなく誠実はただ一片の知識と化し、筋道はた
だ筋道だけのものになって彼は安易に時勢に追隨しクロードィアスに上手に利
用され、いそいそと立ち振舞っているということだと思ふ。感受性も同時に硬
化して人の心の動きを察することなど出来ず、ハムレットに軽蔑され疎んぜら
れる。スパイ行為の徳義性など一度も考えたことはない。そしてそれが自分の
宿命とでもいった風に、スパイをやっているときに命を落す。皮肉である。

ガートルード

普通なら先王の死後、王妃ガートルードは、息子のハムレットが既に30才で
オフィーリアが言う様に、美しい国を作る希望の人でありその美しい国を飾る
花で(III.1.160)あって、又フォーチンプラスが言う様に、その座に即けば彼こ
そこの上なく立派な王となつたであろう(V.2.408,9)人なのだから、彼を王の
選挙に立てる位いの計らいはしてみる筈である。しかしそうした様子は全く伺
えない。しかし私は妃がそれ以前からクロードィアスと通じていたとは考へな
い。妃は進んで罪を行う人では勿論ないし、又隠れて何か事を行う様な性質で
もない。第一幕の亡霊も、寢室の場の亡霊も妃に対しては寛大である。長い年
月荒い風にも当てぬ程に愛され、先王の寵愛に慣れて安易従順が妃の習性にな
り、自分で考へて行かうという普通の力を失っている人であると思ふ。寵に甘え

てジャジャ馬にならないところが性質温和で気立ての優しい人であるとも言える。国務会議の場で初めてハムレットと語る場所、二幕二場でハムレットのことをローゼンクランツ、ギルデンスターンに頼むところでも、オフィーリアが囀りの役をする前、三幕一場で妃が彼女に語る言葉の中に表われている願いにも、又オフィーリア埋葬の場で可愛いハムレットの妻にと思っていたのにといい言葉にも、その時々で、子を思う母の優しい心が素直に現われている。このような母だから、ハムレットの悩みが利くのである。

先王に劣らずクロディアスも妃を寵愛している。妃も又その愛に甘えて如何にも楽しそうである。自分で考えて行う力をただ従順という習性のうちに失っている妃の姿である。ハムレットの狂気の原因をポローニウスが失恋だと主張するのに対して、妃は王に向い『やっぱりあのことじゃないでしょうか。父の死と、それに私達の早過ぎた結婚。』(II.2.56,7) という重大な内容を含む言葉を、そして筋の上では王からハムレットに働かせる最初のきっかけになる言葉を、息子の狂気に就て慎重な考慮や観察を抜きにして不用意率直に言う妃である。妃のこの言葉は舞台上相当の効果を持つ筈である。王はこれに『うん、洗ってみよう。』(58)と答える。寢室の場でハムレットに斯ういう浅ましい自分の姿をはっきり鏡に写して見せられ、妃となって恐らく初めて、ガートルードは自己というものに目覚める。そして妃は心から悔悟する。併し、そのあとでも尚ハムレットは妃に向って、王と相変らずイチャツクがいい、僕の狂気は贖ものだと知らせるがいい、など残酷な言葉で母を苦しめ、又英国に旅立つときの別れでは『父と母は夫婦。夫婦は一体。』(IV.3.53-4)と、王と母の前で結婚式の言葉まで持ち出して、寢室の場で母をなじった「結婚の誓約」(III.4.44)にからめて、皮肉のうちに痛烈に母を責める。それは従順に慣れ安易に流れ易い母が、再び今迄の習性に陥ることのない様にと厳しい警告を母に向って発しているのである。その心配は必要がなかったようだ。そして最後の場で妃はハムレットの見事な仕合振りが嬉しくてたまらず、王がハムレットにと言って注いでおいたコップを浮々と自分の手にとり上げる。王が慌ててそれをとめるが妃はかまわず飲む。妃は初めて、息子の前で、王の言葉をしりぞけて見せたのであ

る。しかしそれが同時に妃の命取りであったということは哀れである。これも運命の皮肉である。

クローディアス

クローディアスは冷静で昂奮せず、頭は冴えて常に機略に富み、とっさの間に詐謀をめぐらす。人に向えば常に慇懃を尽し、顔に柔和な微笑を忘れず、巧みに人の心を捉らえる。自分の慾望のためにはあらゆる障碍を砕き、何んな卑劣な手段を用いても目的を遂げるねばり強い、凶太い土性骨を持っている。その類笑みも愛情も、野心と保身と情慾が形を変えたもの。一度の祈りと数度胸中の不安を洩らすほかは、彼の言葉は、徹頭徹尾偽瞞であって、野心と保身と情慾のために、外見は美しく優しく見える言葉であって、底に一片の誠意も真実もない。だから又彼は誠の人情の味、その美しさを全く知らぬ片輪者である。彼は内に怖ろしい罪を抱く卑怯者なのである。しかし彼の心を知らぬ者達には、——もとより彼はその本性、本心をまわりの人々から完全に隠し通す冷静と巧知をもっているが——彼は誠に優しく有能な、よき国王と見える。だからポローニウスを始め他の顧問官達、廷臣達は彼に懐柔されている。斯うした彼の人柄は國務會議の初めから既によく表れているが、またポローニウスが不慮の死を遂げたときの彼の言葉『もしそこに居たら、余が同じ目に遇っていたであろう』(IV.1.13)の中にも表れている。彼の頭に第一に浮ぶのは保身である。これは罪を抱く者の臆病である。ポローニウスは自分の即位に大きく貢献した恩人、國務會議の場で唇齒輔車の関係 (I.2.47,8) にあると自分の口から公言した間柄、ハムレットとのあいだに立っては何時にも自分のために骨を折ってくれた男である。而もなお第一に王位への執着が心に動き、更に彼の死をすぐハムレットの弾劾と追放の手段に用いるこの王を、囹の場の後でハムレットを悲しむオフィーリアの美しい愛、思いかけずポローニウスを刺して心から後悔するハムレットの立派さに比べれば、彼の卑怯卑劣は一層明瞭になるであろう。妃を寵愛するのも、自分の野心、情慾が満されての上でのことである。『朕の命朕の魂と切っても切れぬひと。』(IV.7.14)である妃が毒の盃と知らず飲ん

で死にかかっているとき、なお彼は其の場に居る人々を巧みにいつわって自分のたくらみを誤聞化そうとする。これらは保身に汲々たる卑怯者のずるさ、凶太さを表しているのであって、彼の勇気がさせるわざではない。レアチーズが一揆を率いて乗り込んで来たとき王は沈着である。これも王の勇気ではなくするさである。要するにレアチーズをハムレットの敵にしたい考えなのであって、彼はレアチーズの単純な頭と一本気の性格を心得ており、他方自分の才知と舌三寸に自信を持っていることなのである。この自信は既に妃の誘惑に、廷臣達の籠絡に顕著な実績を挙げたもの。そして憤激に我を忘れ思慮を失っているレアチーズは王の手にいとも容易に操られ、王の予定通りハムレットの敵になるのである。

ハムレット

ハムレットの人柄や性格は早く第一幕の中に摺むことが出来る様である。ハムレットの性格を云々するとき、誰れでもが重要な問題としなければならぬ彼の激情、感情の昂奮、を先づ取り上げてみよう。第一幕の中では、第一独白にそれは最も著しい形で表れている。独白の最初に『ああ、汚れ切ったこの肉体よ、溶けて清らかな露になれ！』（2.129,30）という言葉がある。心身の汚れを嫌い清純を尊ぶ人であることが判る。これを冒頭に、『世の中が腐って母の墮落にまで到るとは！』（137）をなかに挟んで、30行のあいだ激情の言葉が続く。第一独白の全てが彼が信頼し切っていた母の墮落、その母の罪を歎く言葉で成っているのである。これを裏返えせば、第一独白は母を慕い母を求める子の叫びであり、母に強くつながる情愛が訴える歎きである。彼には母の罪を突き離して考えることが出来ないのである。母の罪は直接自分につながる罪として、自分の心身の汚れとして感じるのである。これは深く母につながる子の誠実と情愛の絆である。彼が母を邪淫の罪に誘った王をひどく憎むのも、母を愛し慕う心が憎むのである。国務会議の場で喪服のハムレットが初めて母と語る（2.68—86）ところ、ハムレットの言葉によそよそしい拘わりがあり、彼は母に

怨み心を訴えているが、そのなかにおのずから母の胸を慕う子の情がにじみ出ている。これを彼が心から憎む王に対する短い辛らつな答えと比べれば母に寄せる彼の気持ちが一層明らかになるであろう。(ハムレットが愛情をもって語るとき彼の言葉は長くなる、反対に軽蔑憎みのときは短いということも一つの特徴である。)要するに私は、ハムレットの激情が彼の真剣な情愛と結び合っていることに注意を向けたいと思うのである。

第一幕の範囲から逸れるが、ついでに首と尾という意味で彼の最後の激情の表れに就て見よう。オフィーリア埋葬の場である。レアチーズが妹に対する情愛を激越な行動と言葉で表すのを見て、ハムレットも負けず『われこそはデンマーク王家のハムレット。』(V.1.280,1)の名乗りを皮切りに激越な行動に出、激越な愛情の言葉を吐く。彼があとでホレシヨールにそのことを後悔しているなかで『だが、あの時は、彼の華手な歎き振りを見て僕はカーッとなってしまったんだ。』(V.2.79-80)と言っている。これは言い換えれば彼がオフィーリアを愛しているということである。尚附け加えて言えば、この場合、彼がオフィーリアの死を、突然其の場で初めて知った驚き(V.1.265)、と彼の名乗りに伴われる復讐の張りつめた気持ちとが彼の激情に同時に作用しているということが出来る。斯ういう時に、レアチーズの歎き振りが、オフィーリアへの情愛を独占した様なその振舞いが彼を激昂させたのである。しかしその時も、若しレアチーズが「実に立派な青年」(1.247 埋葬の場でハムレットがレアチーズを最初に見たときの言葉)ではなくて、ポローニウス、ローゼンクランツ、ギルデンスターンの様な不誠実な男であったとしたら、黙過はしないとしても、恐らく軽蔑してひどくからかうか皮肉のかで、愛情を競い合う対抗の意識は持たなかったであろうと思われる。要するに、彼の激情、感情の昂奮は必ず何等かの形で彼の真剣な気持ち純粋な情愛と直接に結び付いているのである。

彼の激情、昂奮の例をなお二、三第一幕の中から拾ってみよう。地下亡霊の場で、亡霊をからかう如き浮々した彼の言葉(5.150以下)は彼の感情の昂奮を表している。ここでは父に対する敬愛の情がその根本であって、それに亡霊から秘密を打ち明けられたという親近感、運命の突破口が見付かった喜び、復讐

の義務は引き受けたから安心しておいでなさいと自分の確信を亡霊に知らせる気持ちなどが影響して働らき、浮きうきとした昂奮になっているのである。ホレイシヨウが亡霊を見たことをハムレットに打ち明けるところ(2.190以下)でハムレットは漸層的に緊張していく。勿論、父への真剣な敬愛の情の表れである。又そのすぐ前のところでは、

ハム。諸事儉約さ、ホレイシヨウ君ノ葬式の肉入パイのお余りを冷えたままで人でなしのけちんぼが結婚披露に使ったわけさ。ホレイシヨウ君、こんな日を見る位なら一足さきにあの世で、不倶載天の仇と一勝負していたかったよノなつかしいお父さんノお父さんが見えるような気がする。

ホレ。何処にです、殿下ノ

ハム。僕の心の目の中にだよ、ホレイシヨウ君。(2.179—185)

この昂奮も父に対する真剣な敬愛の情である。(父を語るときは母の場合と違って敬愛の情をありのまま率直に表している)。『お父さんが見える様な気がする』は、亡霊の出現と神秘的な繋がりをもっており、亡霊から伯父が暗殺の手下人であることを聞いて『おお矢張りノあの伯父だノ』(5.40.1)と言うのと共に、ハムレットの感を表している。(ハムレットは実に感のいい人である)。しかし之等は彼の直観の働らきで片付けるよりは、寧ろ前の言葉は純粹な敬愛の情に於て精神的に直接父に繋がっている誠実な彼の心が自分の内に画く父の影像であり、後の言葉は誠実に母に密着している純真な心が母の墮落を歎き、それがもとになって伯父の憎悪と直結しているところから産れる感である。母の罪を悩むところに産れるこの感は第一独白の終り『これはいい結果にならぬぞ、なる筈がない。』という彼の予感に就ても同様に言い得る。又彼がホレイシヨウの顔をエルシノアで初めて見た時の喜びの昂奮(2.161以下)は悩めるものが心の宿を得た喜びを表しており、ここには友情の深さを汲みとることが出来る。要するにハムレットは清らかで誠実であることを尊しとする純粹な人柄で人間自然の情に厚い人であり、彼の全ての激情は総て彼の純粹真剣な情愛に発しているという点を強調したいと思う。

次にハムレットの人柄に就て情愛以外の点を第一幕のなかから取り上げてみ

よう。ホレイショールが危険を警告するのも聞かず、亡霊が招く方へみづから突き進んで行って彼の勇気を劇の初めから見せている。又父の亡霊に会った直後亡霊の眞実性を疑っている位だから、卑怯者なら、仇討の義務を無視或は回避することが出来た筈である。彼の誠実と彼の勇気がその義務をみづからに課すのである。亡霊に会った後、ホレイショールとマーセラスに『君達は友達だし学者であり武士なのだから』(5.41)と言って口外しない様に二度重ねて頼み、劍の柄に手を置いて誓いを立てさせ、又その前にも彼等二人とバアナアドーに亡霊出現のことを口外せぬ様にと二度重ねて頼んでいる。これは彼の思慮、慎重な性質を表していると共に、彼が彼等の誠実に信頼していることである。ずっと節度ある友情を保ち先王の追憶を尊ぶホレイショールと、他方少時時代から王子の友達であり乍ら、軽薄に権力におもねり誠実を説かれても耳をかさないローゼンクランツ、ギルデンスターンとの相違は、要するに誠実の問題である。そして彼等不誠実な輩は彼等に似合しい死に方をする。ハムレットは彼自身が誠実であると同時に彼が交わる人々に誠実を要求する人である。

ホレイショールから亡霊出現の知らせを聞いているとき、次第に昂ぶる昂奮を『今夜見張りに立つ。』(2.242)という言葉で切っぱり打ち切る。これは自己を抑制する力である。又亡霊に会った直後の昂奮に理性的反省を加える(5.92,3)。これら彼の思慮、慎重、抑制、合理が、彼がレアチーズと大きく違うところで、彼が父の敵を討たんと願う熱意はハムレットと変るところはないが、彼は復讐に猛ってその揚句、簡単に王の口車に乗り、更に妹の発狂を見、次いで溺死の知らせを聞くと、仕合いの劍に猛毒を塗って、終に自分のモラルの埒外に踏み出し、彼本来の誠実を外れてしまうのである。

ハムレットに起る激情と共に彼に備わる思慮、慎重、抑制、合理の力は彼の心の振幅が大きいことを示していると言えるであろう。彼が突然投げ込まれた根強い醜悪な現実、に向って闘かうその運命が異常なものであるため彼の激情と理性とは彼の中で調和せず、互に牽引し合う関係で働いている。併し彼がこの強力な二者の間に揺さぶられるところに、体験を通して彼自身の大きな成長が約束されており、その厳しい試練をくぐってのち彼の眞の成長が実現する

のである。

第一独白で母の罪が直接世人の墮落と繋がったり、女はすべて脆きものになったりする。デンマーク人の飲酒癖に就て語るとそれが人間性の問題につながる(4.13—38)。或特殊な問題と人間、人生、運命の問題とが容易に結び付く彼の思考傾向は、彼の場合、ロマンチック・センチメンタリズムではなくて、自分自身の感、誠実、思考、判断、教養に対する自信から来ている。これが単なる感傷であるか、それとも根拠ある自信に基づくものであるかは、結局その人の人柄によって決まり、その言葉が人間人生運命の真実にどれ程触れているかによって決まる。私は彼のこの思考傾向に又健全な、大きな振幅を見出してよいと思う。情熱と意志だけで実行するレアチーズやフォーチンプラスは誠実なるが故に立派であっても、この点人間としては片輪である。彼等はこの意味でハムレットと対照されていると思う。

心の働らきのスケールが大きいハムレットは資性温順、純真、誠実であるが、十分な理由があれば必要に応じ人に対し十分厳しくなれる人である。劇中劇の場でのオフィーリアの残酷な扱い、死んだポローニウスに対する侮蔑冷淡と深い後悔、ローゼンクランツ、ギルデンスターンを葬る仕打ちなど、この側光に照らして観る必要がある。弱者が無理して自分をけしかけ無理な強よがりを見せているのではないのである。

ハムレットの成長

ハムレットは第一声、『些か近親以上だ、人倫を外れてね。』(I.2.65)の傍科白と第二声『そりや違います。日に当りすぎてる位です。』(67)(亡父の上に更に父を押しつけられて甚だ迷惑だ。ひどいことに家(王位)から追い出されている。家(肉身の情愛)から放り出されている)と彼の懊悩、憤りの原因を、王と妃と彼との間の緊張した関係の中に言い表している。

父の亡霊は彼に、『人間の情が残っているなら、投げ捨てよ。』(I.5.81)と言うが、その「命令」(102)通り復讐の鬼と化そうとしても、彼の人柄の一方

をなしている理性が承知しない。これがレアチーズと違うところである。亡霊と会った直後、その昂奮のさなかで、『そうだ、地獄も一枚加えようか？(チエツ、何てさまだノハムレットよ、しっかりせい。)](93)と言う。これはドオバー・ウィルソン氏が言っている様に、正しいルネサンス精神を、ドイツに移植したマルチン・ルターで名高いウィテンベルヒ大学の学生ハムレットが、新教精神の立場から亡霊は悪魔が姿を変えたものではないかと一時反省したのである。(これには、何時ももの柔らかに頬笑んでいる王と暗殺のやり口とがぴったりしないという事もあるであろうか。)併しすぐこの理性的反省を取消す。

更に一方、『天地の間には理窟などではとても片付かない色々のことがあるものだよ、ホレイショー君。』(166,7)と言うのは、勿論理性を超えた神秘が人生に存在することを言っているのであるが、同時にそれは、自分は母の罪に懊悩して来たが今その上に父の復讐という義務が加わった。この二ツは關聯結合した形で自分に解決を迫る。その解決は理性では出来ない。それは理性の世界を超えたものである(参照26頁)。全人格的な力、あの亡霊と同質の魂(67)、全生命をもって当らねばならぬ問題であると言っているのである。又この様に理性を超えた問題にも背を向けないで大胆にその解決に向うところに、ルネサンス精神の高邁な探究冒険の精神がある。今彼には、王に対する憎悪と復讐、母に対する情愛と悩み、という共に自然の情に根深くからんだ二ツの問題が重なり合った。これは当然彼の今迄の激情を更に一層激化するであろう。

彼は王の秘密を握るための第一手段として佯狂の手段を取る(172)。王は冷静な人だから尋常の手段では秘密を掴むことが出来ないが、狂人なら奇矯な行為も許される。思い切ったことがやれる。それに王は王位保持が確実になったという安心から、つい隙を生ずることもあり得る。佯狂の思い付きに就ては、ホレイショーが、亡霊が突然怖ろしい姿をとり、『理性の抑制力を奪って殿下を狂気におとし入れるかも知れません。』(4.73,4)と言っているのと縁づけてよいかと思う。

彼は先づオフィーリアに会いにゆく。理由は、(1)大任を負うた以上私的な恋愛沙汰は暫くお預け、其上大任遂行で死ぬかも知れぬから狂気の姿を見せて、

一時恋も結婚も見送る心構えを彼女につけてやろう。これは彼がオフィーリアを心から愛している証拠である。(2)偶々、近頃会うことを避け手紙も受け取ろうとしない。恋ゆえの物狂いという筋も立つ。(3)何としても自分の身近かで一番安心して何んなことをしてもなお信頼出来るのは彼女である。(4)その上顧問官の娘によって佯狂の効果をテストしてみるのが同時に王の耳にとどく上からも一番効果的である、という辺りにあるのではなかろうか。

ポローニウスはこれを早速恋の物狂いと決めて王に報告する。妃は既述した様に父の死と早すぎた結婚のせいかも知れぬと言ひ、これがきっかけの様に、王の側からハムレットに直接働らきかける。

ポローニウスが先づハムレットに探りを入れる。

ポロ。殿下、私がお判りになりますか？

ハム。ちゃんと判っているよ。君は魚屋だ。

ポロ。ちがいます、殿下。

ハム。それぢや人並に誠実な人間であってほしいね。

ポロ。誠実ですか、殿下。

ハム。そうぢやよ。誠実は此の世の中ぢや、一万人の中から選び出した一人ってことだからな。(II.2.173—9)

お前は王と妃の間を取りもつ様な臭い真似をした魚屋（俗語で女郎屋の主人の意）だ、と言っているのである。彼が人にはっきり誠実を説くのはポローニウスが初めである。次でポローニウスが『何をお読みですか殿下？』と尋ねるとハムレットは『言葉だよ、言葉、言葉。』（194）と答える。彼はホレイシオーに送った手紙で、『僕が君に聞かせたい言葉を聞いたら、君は啞然とするだろう。だがその言葉もその内容の大きさに比べたら全く取るに足らぬものなんだ。』（IV.6.25—8）と書いている。ここにある言葉とその内容との対比からもこれは、内容のない言葉だけのもの、即ちお前は「馬鹿なおしゃべり屋」でそれが又得意らしいが誠実味は無い男だ、という意味。次いで本の内容をたずねると、老人の悪口が書いてあるんだと言って、『しかしこんな風に本に書くのはよくないと思うよ。というのは、君だがね、君がもし蟹の様にあとすざり出

来たとするのだ、君は僕と同年輩ということになるからね。』(II.2.204-6)と答える。これは先王ハムレットのことを思い出してその頃のポローニアスに返れ、そうすればおれはお前と手を握り合うことが出来る。要するに先王のことを忘れぬ誠実なポローニアスになれと言って諭しているのである。

そこにローゼンクランツとギルデンスターンとが王の廻し者になってやって来る。ハムレットはもうそのことを知っている(II.2.290)が喜んで二人を迎える。妃が二人に向って、『皆さん方、ハムレットはお二人のことをよく申しておりますのよ。あの子には、あなた方ほど心を寄せている人はほかに御座いませんのです。』(19-21)と言っているのを見ればハムレットの気持ちもよく判る。王の廻し者だからホレイショを迎えた時ほどの喜びはないが、ポローニアスの様に「大きな赤ん坊」(400)扱いはしていない。彼が『デンマークは牢獄だ。』(249)と言うと、ローゼンクランツはデンマークではなお狭しとする「大望」(258)がおありですから、と早速探りを入れる。そこで彼は彼等に誠実であるようにと求める。君達は素知らぬ顔をして通すことの出来る人柄ではないんだから(287-90)、僕達の友情、同じ若い身ぞらにかけて、今までずっと保って来た互いの愛情の義務として率直に、王に頼まれたかどうかを白状してくれと懇願する(293-300)が別に利目があったとも思えない。彼の気持ちは彼等が王の味方になるか自分につくかといったことではなくて、彼の少年の頃からの友達である彼等にどんな時でも、誠実に振舞うだけのことはして欲しいという彼の要求であり懇願である。『人間とは何と素晴らしいものだ！理性は気高く、才能は無限ノ姿、振舞いは唯見とれるばかりノ行方とて天使の如く理解力は神に似てノ…ああしかし、僕にとっては、人間もただ土くれの塊りだ。』(315-21)。これはルネサンス精神が自分の醜悪な運命の現実に悩む歎きである。併し二人は彼の気持ちを全然判ろうとしない。ローゼンクランツはこの悲痛な歎きを聞いてニヤリとする(322,3)。彼がそれをなじると、ギルデンスターンが、間もなく役者達がここに着くことを彼に知らせ、うまく此の場を誤間化する。ローゼンクランツはスパイに積極的に何時も攻勢に攻勢にと出る。ギルデンスターンは少し人が良い、王から頼まれたのだということも彼が白状す

る。『さ、諸君握手しよう。…これでお別れとしよう、役者達を歓迎してやる仕方が、こりやどうしても相当目立つものになるんだが、諸君達の款待振り以上と見えちゃよくないからね。』(388—93)君達は役者以下の人間だよ、と言っているのである。彼等を軽蔑してはいるが未だ憎んでもいないし敵として警戒してもいない。彼の友情の広さと厚さをそこに伺うことが出来る。そして、『ところで、おち父とおば母は勘違いしてるんだね。…僕は或点でだけ気がふれているんだよ。』(393—6) とつい秘密の一端を洩らす。囹の場でオフィーリアにふと決心の一端を洩らすのと同じである。ハムレットは少しでも彼が愛情を持っている人には言葉かずも多くなるし、心を許すのである。彼は更につずいて二人に、現今の芝居や役者の様子を熱心になすね(440以下)、やがて役者達を迎えると、胸の悩みも忘れた様に浮きうきとして楽しそうである。これは彼の心の働きの広さを表しているであろうが、又彼が芝居好きであるという事は旅行に劇団を伴っていったというエリザベス女王の、その時代のスピリットを表している。英国ルネサンスの精神である。ポローニアスが、『殿下、役者共はその身分に似合わしく、彼等の値打ち通りにもてなします。』と言うと、彼は『誰れでも値打ち通りにもてなされたら、刑罰をまぬがれるものは居ないぢやないか。役者達をお前自身と同じ名誉權威の人たちとしてみてもてなすんだ。』(555—8) と言う。これはルネサンスの人道主義の声として聞くべきであろう。ここで、主役俳優のトロイ戦争のくさりを知っているうち、芝居で王の秘密をあばこうと思いつく(565—8)。役者の朗誦のあと、『おお、何という碌でなしだ 意気地なしだ、このおれは！』(576) という激しい自責で始まる独白になる。この激しい自責は復讐の熱意と相俟って、彼の心に激しい感情の起伏を描く。ここでも彼の自然の情愛と理性とは調和せず、情愛から発する激情が優位を占め、自責は彼自身を淫売婦に例え、おさんどんに例える自嘲へと進む(614—6)。しかし、そこから一転して、『とんでもない！馬鹿な！おれの頭よ 智慧を出せ！』(617) という理性的反省になり、『芝居で王の良心を搦えてやろう。』(634) という結びになる。ここには激しい自責、復讐にはやる激情はあるが、も早憂鬱のかけらもない。

一方、王はハムレットにその様な計画があるとも知らず、ローゼンクランツ・ギルデンスターンにハムレットの気持ちをもっと刺戟して、更に色々の娯楽にどんどん向けてくれと頼む(Ⅲ.1.26.7)。ここにも運命のいたずらがある。

続いて、『生を保つか、死を賭けるか。問題はそこだ。』(Ⅲ.1.56)で始まる独白になり、これは次の様な意味を持っている。

(1) 筋の上から大切である。王とポローニアスが隠れているが、ハムレットの思考は、そして特に思考が決意の実行力を零にする(83-8)という考えが、王の考え方(Ⅳ.7.117-24)でもあって、王の胸にはピタリとひびく言葉であるので、とても狂人の言葉とは思えない。王はハムレットの気遣いはニセモノであることを知る。

(2) ハムレットの心境である。王の秘密を掴むために彼がとった第一の手段は佯狂である。しかし慎重な王からは何の確証も掴めなかった。彼は誠実な人であるから、父子の情が一日も早く復讐を遂げよと彼をせき立てる。彼は堪え切れぬ気持ちでいたが、役者達の来訪という偶然のことで、今彼は彼が絶対確実と考える第二手段をとる段になった。彼は王の有罪を半ば信じている。芝居で確証さえ掴めばあとは実行だ。母の罪に悩んで以来、今初めて彼は運命の突破口を確実に自分の手で掴もうとしているのである。彼は初めて期待に充ちて、緊張している。仇討ちは生死を賭けて行くべき大事である。死を賭す覚悟がなければならない。これがハムレットの心境である。

この心境からこの独白を見ると、『生を保つか、死を賭けるか。問題はそこだ。』につづく『残酷な運命の矢玉をずっと心に堪えて生き永らえるのが立派なのか、それとも武器を手に荒れ狂う海に乗り入れ闘ってその波瀾を鎮めるのが立派なことなのか？死ぬことは眠むること、ただそれだけのことだ。眠りによって、胸の痛み現身の受けねばならぬ数々の苦しみを終らせるものなら、死こそは願ってもないものだ。』(57-64)は、彼が死を賭す覚悟に於て死を歓迎していることを読みとることが出来る。ここで『死ぬことは眠むること、ただそれだけのことだ。』は彼が死の覚悟を述べているのである。これは最早嘗ての第一独白の自殺の願いではなく、死を賭して運命と対決する彼の期待の中に

入って来る死の覚悟である。これらにつづく『死ぬことは、眠むること。眠むることは、そうだ恐らく夢を見ることだ。』(64,5)以下は、世人が社会の中に憂る色々の悪、権力者のひどい仕打ちや、傲慢、役人の横柄、其他色々の不正、不合理をちっと心に忍び、自殺によってそれを逃れようとしないう理由を考えている。しかし、世間一般の問題として彼が考えているこの現実逃避の死と彼が覚悟している上述の死との間には大きな違いがある。そして最後の『この様にさきざきを考えるから皆臆病者になるのだ。そして本来の決心の色が青白い懸念の色で一面に塗りたくられ、高く張った大事の計画もこれを考えるとその向きを変え地中にもぐって実行の名を失ってしまうのだ。』(83-8)は、死を怖れる一般世人の例を以って自己を戒め、期待に充ちている現在の彼の心を固めているのである。この、落付いた独白では理性が感情の優位にあり、激情は強い思考の蔭に姿をひそめてしまっている。同時に又、独白では、ここに初めて武人ハムレットの風貌が顔を出していることを観取することが出来る。

③ 第一独白との相違である。第一独白は出口のないゆがんだ運命の内て懊悩する歎き、訴え、叫びで終始したが、これは思考で終始している。1 汚れ切ったこの肉体よ溶けて清らかな露になれの叫びが、生か死かという問題の思考になり、2 デンマークは雑草の蔓る庭の歎きが、デンマークの世相のより具体的な批判、諷刺になり、3 胸よ張り裂けろという叫びで終った結びが、運命と対決しようとする期待と張りつめた気持ちを表白する言葉で終る。この二つの独白の間の相違はこの劇の進行の様子を見せていると同時に、ルネサンス精神ハムレットが誠実と勇気をもって、厳しい試練の体験に堪えてきた跡を如実に表している。

ここでオフィーリアが祈りを捧げている姿を認め、「ニンフ」と呼びかける。愛情と軽いからかいの気持ちを含んだ呼びかけである。彼女は祈るほどの罪を持たぬ娘であるからである。そして、『お前のお祈りのなかに僕の罪をみんな入れといておくれ。』(III.1.88.9)と言う。直接には、母より伝わる罪、佯狂で彼女をあざむいている罪などを言っている。彼女は彼女に似合わない変に固苦しい言葉で今迄の彼の贈物を返そうとする。『君には何もやりはしなかった

よ。』と答える。彼女は今迄の固苦しい言葉とはうら腹に、悲しい顔をする。それでもなお、『高貴な心にとっては高価な贈物もその贈主の心が冷たくなった時には』云々といった誠に彼女らしくらぬ紋切型の言葉を数行に亘って述べる。彼には彼女の本心が見通した。彼女が自分を避けていたことと思ひ合せ、すべて父親の指図で心にもない芝居をさせられていることが判る。純真無邪気なものが不誠実のお芝居をする。無邪気なもの程それは怖ろしいことだ。この純真な娘をデンマークの毒気で汚してはならない。彼は彼女に誠実を説くのである(103—16)。つづいて、自分の母の様にならぬようにと願い、まわりの人間は皆けだものだと言って、自分が本懐を遂げるまでという思いをも籠めて、『尼寺へ行け』と繰り返す。それにしても、王のために親子揃ってスパイを勤めようと、こんな娘にまで囿りの役をさせるとは何という軽卒極まる父親だ。『お父さんは何処?』と急にたずねる。もし妃の、母の愛情を籠めた願い(1.38—42)を、さき程聞いていなかったら、彼女は、王と父が隠れて聞いていても、ここでもう言葉が出なかったろう。どぎまぎし乍らやっと、「家に」と答える。『おやちは家に閉ち込めておけ、馬鹿な真似は家の中だけでやる様にな。』(135—7)、そしてお前は尼寺に行くがいい、それもすぐにだ、など色色と諭しているうち、別れる間際になって、『一人だけは生かしておけんがね。』(155)と言葉の端につい本心を洩らす。王は彼を危険な人物なりと知る。

これから行われる芝居を前にして、彼は役者達に演技の心得を説く。役の気分、感情をそのままに、自然な形で表し、誇張を絶対に避けよと教える。そこには自然であることを尊ぶ彼の人柄と、教養の高い、落付いた人柄が出ており、又演劇を絶対確実な第二手段と考える根拠がある。

今迄彼は佯狂を手段とし、王は二人の手先きをその手段にして互に相手の秘密を探ろうとする、謂わば偵察の期間であった。今第二手段をとるに当って彼が最も必要とするのはホレイシヨウの冷静な観察の眼である。『ホレイシヨウ君、君は実に立派な人だ、僕は君程の人に出会ったことがない。』(Ⅲ.2.59,60)とあと20行に亘り、今更ららしく、しかし真面目に、彼の人柄を讃える。芝居によって亡霊の言葉の真偽を確かめたいから、王の顔色に注意してしてくれ、

あとで二人の判断を照らし合せようと言って頼む。これは彼に、自分が昂奮し易いことを怖れる気持ちがあったからでもあろうが、それよりも、今愈々キメ手を擱もうとしている時であり、それによって彼の今後の行動が決定される重要な時なので、この事の重大さが今更らホレイシヨ一の誠実と冷静と不動心の価値を確認しその助力を要求しているということなのである。寧ろこれは、彼の真面目な慎重さの表れである。

ハムレットは生涯に一度だけ彼の方から残酷な仕打ちを行っている。劇中劇の場でのオフィーリアに対する振舞いである。彼は彼女の従順と愛に甘えて、狂気を装い乍ら、衆人の前で彼女を女郎の如く扱うのである。常に冷静を失わぬ王は、どんな芝居を観ても心の動揺を顔に表わさぬかも知れぬ。だからホレイシヨ一の様な観察者が必要なのである。又そのため彼は彼女を相手にして衆人の前で王と妃の不純な仲を露骨に諷刺し、自分が書き加えた科白が出るまでに、大いに王の心を刺戟昂奮させ、言葉と芝居との両方で責め上げ様とするのである。それに斯の様に諷刺されれば王は途中で座を外すことも出来なくなる。オフィーリアはその道具に使われているのである（オフィーリア埋葬の場で激昂する彼の心には、彼の真剣な愛情と共に、ここで斯んな可愛想な道具に使った自責の気持ちが同時に働いていると考えてよい）。

王の怒り（妃を侮辱されたからの怒りという風に見せている）と妃の呼び出しを伝えに来るローゼンクランツはハムレットに対し高圧的であり（326—330）、又事の序でにここでも探りを入れる。ハムレットは彼を完全に見捨てる（348）。ハムレットは人のいい方のギルデンストーンをわきに呼んで豎笛を例にとつて彼にスパイ行為を止め誠実な人になる様長々と諭すが彼はしどろもどろな誤聞化しを言うだけ。ここでギルデンストーンも完全に見放す（360—89）。彼はギルデンストーンにはずっと多く言葉を費している。ここにポローニアスが来て、妃が「すぐ」会いたい、という命令を伝える。ハムレットは『やがて行く』を二度繰り返して彼に答える。そして『やがてと口で言うだけなら簡単だ。』（404）と付け加える。これは、『今は魔の力が働らく真夜中だ、教会の墓地が口を開けて地獄が毒気を吐き出すときだ。今なら、おれにも生血が飲めるぞ、厭

間の明りが怖れ戦のく所業もやっつてのけられるぞ。』(406—10)の気持ちを言っているのである。これは劇中劇の中の科白、『真黒な企らみ、ぬからぬこの手、適面に効く毒薬、時分もよし。仲間は夜の闇だけ、ほかに見ている者はない。激薬よ、真夜中の草から摘み集めてヘカトの呪いで三度び呪いをかけた猛毒よ、お前の自然の力、怖ろしい力を、丈夫な身体に及ぼして立ちどころに命を奪え。』(266—71)と一本の調子でピーンと強く結ばれている。彼は今掴んだ確証を基に、母に悔悛を迫ろうとしているのである。仇を討っても母の、悔悛なくしては彼は生涯救われぬ。これは彼が言葉をもってする真剣勝負なのである。これが彼の「やがて」の意味である。母の寝室に現れるとき、「マザーマザー、マザー」と畳みかける呼び方に張りつめた彼のこの気持ちが表れている。彼は母を淫売婦に例え、王を殺し屋だ道化だとあくまでも執拗に激しく責め立てる。これは真剣勝負に立ったときのハムレットの激しく逞しい姿である。併しここではこの激しさと執拗は、肉身の自然な愛情から発している。亡霊が出現してあとのハムレットはおだやかに母を諭す。『お母さま、どうぞお願いしますから。』(Ⅲ.4.144)は同じく彼の心の底から出る言葉である。そして終に妃は『ハムレット、お前は私の心を真二ツに裂きました。』(156)と言う。母は筋の通った言葉で自分を諫めるわが子のその誠意と純粋な情愛に、終に感動したのである。亡霊と語るハムレットを沙翁は狂気として扱っていない。ハムレットは、『私が本当は気違いぢやなくて、真似をしているんだということ、次から次と王に打明けなさるがいい。』(186—8)と母に言っている。又気違いであったら、母に悲しみと憐れみの情を起こさせはしても、母を改心させることは出来ないであろう。彼は登場前から彼の心を悩まして来た毒気の一部を今打ち払ったのである。

彼は寝室に来る途中で王が祈っているところを見た。併し、彼の仇討ちは王が罪を犯している時に行わねばならぬと考えて見逃して来た(これで仇討ちの機会は一層少くなり実行はそれだけ難かしくなる)ことを忘れ、カーテンの蔭の叫び声を聞くと、王だと思ひ違えてポローニウスを刺し殺す。言葉の真剣勝負の最中に母の寝室に男の声がすれば王だと直感することに無理はない。それ

さ。』(V.2.56—8)と言っている。

彼は波止場に向う途中、ポーランドに向って進軍するフォーテンブラスの軍に出会う。

次々と起ることが皆僕を責め立てて、のろのろしたこの復讐に拍車をかける！人間がただ食って寝るだけのものなら、けものと変るところがない。前を望みうしろを顧みるあの大きな思考力を人間に賦与された神は、その可能性、その神の如き理性を使わないままにカビさせよと、お与え下さった筈はない。さて、浅ましい忘却のためなのか、それとも臆病風に吹かれて結果をあれこれ思いわずらい、ぐずぐずしているせいなのか、どっちのせいかわからぬが、…僕は「これは必ずやるんだ。」とただ言い暮らしているだけだ。それを実行する十分の理由も、意志も、力も、手段も持っていないながら。…まだ若草のあの王子は先の結果など呑みでかかって、命と未来を運命にあずけ、死の危険を冒して軍を進める、それも卵子の殻ほどの地面を得るために。正々堂々名を成さんとすることは、立派な理由があって行動に移ることはあるが、一朝面目にかかわるときは些細な事をも戦いの十分な理由とすることである。ところがどうだ僕は、父を殺され、母を汚され、心も血も振り立つはずなのに、ただ漫然と日を送っているではないか？…おお、今より後は、頭に浮ぶ考えという考えは、すべて残忍であれ！ (IV.4.32—66)

ハムレットのこの最後の独白も亦激しい自責で始まっている。この自責は、彼が誠実なるが故に、「忘却のためか、臆病風か」といった言葉となって自分を責めるが、瞬時と云えども彼がその様な人でなかったことは既に見て来た通りである。彼は「前を望みうしろをかえりみる大きな思考力」によって行動し、既に母の罪を清め、今世直しの抱負と自信を抱いて門出をするところである。今迄にルネサンス精神の逞しい働らきがあり、今それが要求する十分の準備を整え終って新らしい次の冒険に出発するところである。この故にこそ未来へ向うその冒険に真の意義と価値がある。結果を考えず行うことも、この用意の上

でこそ意義がある。フォーチンプラスの勇氣は鉄火の勇氣であり、彼の遠征はハムレットが批判している様に「平和な、有り余る繁栄の吹出もの」(27)である。この独白を、嘗て自分をおさんどんに例える自嘲にまで進んだ自責の独白と比べてみよう。共に激しい自責で始まる。それは共に、彼の情を一貫している彼の誠実が、仇討の遷延を歎く自責である。しかし一方が激情の叫びで始まっているのに対し、これは反省の厳しさを以って始まる。嘗て感情に我を忘れて奔出した激しさが、ここでは思考反省の内に強く押えられた烈しさに変っている。一方が『芝居で王の良心を掴まえてやろう。』という理性的反省で終わっているのに対し、これは猛獣の咆哮に似た言葉で終わっている。この相違は毒殺の確証を掴む前後の相違であり、母の魂を救って自分の運命の一つを克服した前と後との違いである。激情が優位にあった独白から「生か死か」の思考と「さきざきを考えるから」の反省が優位に立つ独白を通して、今彼の激しい感情と強い理性は調和合一した形で働いているのである。それにしても此の猛獣の咆哮に似た結びは何ういう意味を持っているのか、それを調べてみよう。

この独白には「結果」という言葉が対照して使われている。「結果を思いわずらう」と「結果を呑んでかかる」である。これがハムレットがフォーチンプラスから受けた刺戟である。彼の合理性は佯狂でも劇中劇の場でも、王祈りの場でも、妃の寢室の場でも常に効果をはかり、結果を計算に入れていたのである。この点からこの独白の彼の自責が産れる系譜は次の様な順序になる、

合理性 → 効果 → 遷延 → 自責

である。彼が今フォーチンプラスによって刺戟された仇討遷延の自責は、遷延の原因が今迄効果をはかり結果を計算に入れていたことにある、その自己批判なのである。自分の合理精神の欠点を批判しているのである。それは学者ハムレットに対する武人ハムレットの非難とも言い換えられるであろう。彼は今理性の欠点を指摘し、これに猛虎野猪の勇を加えんとしているのである。そして海上に於ける冒険の体験を通してこの二ツが彼の内で合一し、彼の人格を完成するのである。これに加えて、彼は、帰国後、墓場で人間の利慾、虚飾、誇り、才知のおろかしき空しさ、人生のはかなさを「骨々が痛む」(V, 1.101)まで感

得し、人生の悟りを開く。

この独白があるデンマーク平原の場はブリッジ・シーン（懸橋の場）とも呼ばれているが、仇討ちの実行に視点を置いて解釈すると、ここはハムレットが結果を思いわずらい優柔不断に仇打ちを延ばしているうち、遂に王の命令で、しおしおとして、英国に追放されるということになる。しかし、この様に解釈されたハムレットは、王に帰国を報らせる儀式張った正面切った手紙（7.43-8）や次の第五幕の名乗り（1.280-1）で覇気を見せ、王の使者が仕合いの都合を、も一度確かめにくると『やると言ったことは必ずやる。すべて王次第だ。王に於て用意が整えば、こっちは何時でも。今くらい力が張っているときなら時は選ばぬ。』（V.2.208-11）という殺気に満ちた充実した気組みを示し、『一羽の雀が落ちるにも神の特別の思召しがある。』（230-1）、『平常の覚悟が第一じゃ』（234）、と達人の言葉を吐くハムレットに急変することになる。僅か一幕の間に起るこの変化には、その変化を裏付ける劇的必然性がない。

斯の様に見てくると、彼の最後の言葉、『あとは沈黙。』（V.2.369）は人生に疲れた弱者が人生に対する自分の無関心を言い表している言葉ではなくなる。人生に袂別する人の言葉はその人が歩むで来た全生涯の足跡で支えられている。従ってこの言葉の内容は、ここまでのハムレットを或はこの劇のストーリーを何の様に解釈するかによってそれぞれ異なるわけである。私はこの劇を人生をあくまで肯定するルネサンス精神が母の罪に懊悩し、人の不誠実を憎み、王の大罪を憎悪して、様々の悩みと苦闘を経験し乍ら、誠実、清純の一本の線を貫いて厳しい試練に堪え、逞しく自己成長を遂げ、人格を完成し、終に人生の悟りをひらく過程を描いたものと考え。そのあいだに此の人生肯定の精神は母の罪を清め、不誠実を罰し、兇悪な罪を自分の血で洗って、デンマークの妖気を払ったのである。

従って、「沈黙」という言葉は、彼の全生涯の懊悩と苦闘と成長と完成と悟りと、そして彼の人柄の全部の重みによって支えられている言葉である。そしてこの言葉の意味は、

- 1, 達人の拡充充足した精神。顧みて一点くゆるところのない一生であった

という満足。

2. 人生という舞台でこれも亦一役演じた男の一生であるという、達人の軽味ある悟り。

であり、そしてそこには、誠実と情愛の一路を歩み苛酷な現実を克服して人生を悟った人が、死を迎えて従容として静かなる心が表れている。

仇討ちの立場で見れば、ポローニアス、オフィーリア、ローゼンクランツ、ギルデンスターン、妃、レアチーズ、王、ハムレット、と皆死んでしまい、誰一人現実に利益を得た者はない。併し、此の劇には人間の勝利者が居る。ハムレットである。そしてこの劇から現実に利益を得るもの、それは見物人である。

附

違和感が起る原因に、小さな原因ではあるが、一幕の諸所に入っていて一見全体とはそぐわない、水々しい抒情的な表現がある。

1 だが、見給え、朝が灰色のマントをまとって、向うの高い東の山を露を踏んで降りて来る。(I.1.166-7)

2 朝明けの露の様な瑞々しい青春に (3.41)

3. 自分はいい気で桜草花咲く小径を歩いて (3.50)

4. 蛍が夜明けが近いと知らせている。利目のないその光りを白らませはじめた。(5.89-90)

此の中、1は妖気を払う明るい希望、2、3はオフィーリアの水々しい美しさと優しさ、そして4は陰々の影が消えるところ、を表している。之等は言葉としてしは他の部分とそぐわない感じを与えるであろうが、それらが持つかすかな明るさは小論の冒頭に指摘した雰囲気と相対比する効果を上げているのである。尚四幕一場の妃は言葉の端々にわが子をかばう気持ち(一例「思わずやってしまったことを」云々)をよく見せているが、その際全部現在形を用いて妃には珍らしく劇的な美しい表現をする。オフィーリアの水死を報らせるところも叙景的で美しい。これは生れ変わった妃の言葉なのである。